

第六蘊ということになり、一切の有漏が五取蘊に、一切の有為が五蘊に包摂されるということがなくなり、これまた、釈尊の教説と矛盾する結果をもたらす。有部は、これに対して、存在（法）が原因として、結果の存在を取ることが、作用であり、作用は原因としての存在そのものであると主張する。それで、作用と存在は同一であるという。安慧はこの場合の問題点を指摘する。存在と作用が同一の場合は、二通り考えられる。作用と存在が共に現在のものとして同一であるという場合がまず考えられる。この場合、過去・未来に存在はなく、有部の三世実有論と矛盾する。作用と存在が共に三世にわたって同一のものとしてあるという場合が次に考えられる。この場合、作用も法も常住となり、それぞれの未来・現在・過去という区別を何によつてなすのか説明できなくなる。作用もその役割を果たせなくなる。これらの問題点を解決するのは、表面的には安慧は述べていないが、種子説を伴う経量部の現在有体過未無体論であろう。経量部は現在の存在の連続の中で、過去・現在・未来の時間論を打ち立てる。その場合、現在の存在の中に潜在的な作用（種子）と顕在的な作用（現行）を認め、作用と存在は同一であるという立場を取る。潜在的な作用（種子）が早い遅いの差はあっても、次々に連続的に、顕在的となり、それが現在の存在を形成していくのである。有部の認める変化しない法の自体間に因果関係はなく、一瞬一瞬生滅する諸作用<sup>11</sup>諸法間に因果関係が認められるのである。これが釈尊のいう、「此あるが故に彼あり、此なきが故に彼なし」という因果の道理である。有部は、最後に作用と存在（法）は同一でも別異でもないと主

張する。この主張は、『順正理論』の衆賢が作用と法との現在における部分的同一性を認める主張とは異なる。作用は、ある存在の自性でもなく他性でもない<sup>12</sup>と有部は主張する。これに対して、安慧は、自性でも他性でもないものは、ウサギの角のように畢竟無自性であり、三世を区別する役割を果たし得ないと論駁する。作用と存在の現在における部分的同一性を認める衆賢の立場と異なる場合、また種子論を認めない有部に特有の立場からは、作用は畢竟無自性ということになるのであろう。

アティシャとラトナーカラシャーンティ

望月 海慧

十一世紀にインドからチベットに仏教を伝えたアティシャ（九八二—一〇五四）は、中観の論者として知られているが、瑜伽行唯識文献や密教文献への言及も多く見られる。『菩提道灯論細疏』にも、中観を師ボーディバドラから、唯識をセルリンパ（ダルマキールティ）とシャーンティバ（ラトナーカラシャーンティ）の二人の師から学んだことを述べている。本稿では、その著作と伝記からシャーンティバとの実際の関係を考察する。

『菩提道灯論細疏（D. No. 3948）』では、シャーンティバの名前が二箇所而言及される。最初のもの（D. 269a2）は律儀の解説において、彼の『秘密集会曼荼羅儀軌注釈』（D. No. 1871, 52c5）が引用される。内容はアビダルマの五果の解説であるが、典拠は密教文献である。二つ目（D. 280a5）は、根本偈の空性論証の解説において中観の論書を列挙する直前におい

て、前述の唯識を学んだことを述べるものである。

『般若波羅蜜多撰義灯論 (D. No. 3804)』は、マイトレイヤの『現観莊嚴論』を簡略にまとめた論書である。アティシヤは、『現観莊嚴論』の注釈者たちに言及し、シャーンティパの名前に十度言及する（一五、二三、二二一、四三四、四七九、五二六、六四一、七三二、八〇九、九四九、以上パーダ番号）。このうちの七つは、ハリバドラの解釈との相違を指摘するものである。ハリバドラの言及数二十二は、シャーンティパの倍であり、アティシヤがハリバドラの大注のチベット語訳を改訂しているからである。

『法界見歌 (D. No. 2314)』は、ナーガールジュナの『法界讚歌』とマイトレイヤの『現観莊嚴論』『宝性論』の引用により法界を解説した前半とアリーヤデーヴァの『智心髓集』に基づく宗義解説の後半からなる。この後半の唯識思想の解説における七偈（一八七―一九一、二一八―二二二、二三〇―二三九、二四六―二四九、二六〇―二六三、以上パーダ番号）は、シャーンティパの『中観莊嚴論注中道成就 (D. No. 4072)』(D. 256b4, 257a1-2)、『般若波羅蜜多優婆塞提舍 (D. No. 4079)』(D. 257a1, 257a3-4, 257a5, 257a6-b1)と指摘されており、唯識の教義については、シャーンティパの論書に依拠していると言える。

『一切三昧耶集 (D. No. 3725)』では、真言乗の解説において (D. 44b3-4) その大乘に対する優位性の根拠として『三乗建立』(D. No. 3712, 101b4) が引用されている。両者ともに、波羅蜜乗の上に金剛乗を認識している。

『経集撰義 (D. No. 3937)』は、ナーガールジュナの『経集』に対する簡略な概説書であり、シャーンティパへの言及はない。しかしながら、シャーンティパには『経集』に対する詳細な注釈書『経集釈宝明莊嚴論 (D. No. 38935)』があり、本論はこの注釈書に基づいて『経集』の構造を分析していることが確認できる。

アティシヤの伝記である『アティシヤ詳伝』では、シャーンティパの名前を十箇所に見ることができ、そのうちの七つは、教えの相承を述べた部分に出ている。すなわち、究極のマントラ（〇一八、アイマー校訂本の番号）、秘密集会タントラ（〇二〇）、真言乗と波羅蜜乗（〇三四）、因明（〇四三）、宗義（〇四六、〇四七）、教誡（〇五六）においてアティシヤの直前がシャーンティパとなっている。残りの三つ（一一〇、一一三、三七九）は、アティシヤの経歴の解説において、シャーンティパの八千頌の解説と中観批判、彼のタントラを翻訳したことが述べられている。

以上のことから、アティシヤにとってシャーンティパは、唯識の教えだけでなく、密教の教えも受けている師であることが確認できる。ただし、その言及数は、同じ師であるポータイバドラに比較すると、それほど多くはなく、強い思想的影響関係は確認できない。